

幼児についての集団遊戯療法の試み

目 次

はじめに	1
I 集団 遊戯療法について	1
1 集団遊戯療法の原理	1
2 集団遊戯療法の方法	3
II 集団 遊戯療法の実施	4
1 目 的	4
2 方 法	4
1) 対象児	4
2) 治療者および治療方法	4
3) 治療の回数と期間	5
4) 諸検査	5
5) 観察記録と整理	5
3 経 過	6
1) 各回の治療経過	6
2) 各子どもの治療経過	15
3) 母親の面接相談	16
4 結果と考察	17
1) 各子どもの変容	17
2) 全体的考察	19
おわりに	20

はじめに

当教育センターで実施している子どものための教育相談は、これまで、主として、個人を単位として行ってきた。すなわち、小さい子どもの場合、子ども1人に治療者（セラピスト）1人があたる個人的な遊戯療法と、親の方には、母親あるいは父親に相談者（カウンセラー）1人があたる個人的なカウンセリングを行なうものである。

心理療法には、個人を対象とする上述のようなやり方のほかに、2人以上の対象を同時に扱う集団心理療法（Group Psychotherapy）がある。集団遊戯療法（Group Play Therapy）および、集団カウンセリング（Group Counseling）などはそれである。

昨年度は、これまで実施してきた個人的な遊戯療法について、数ある事例の中から、ひとつの事例を取りあげ、その治療過程をまとめてみたが、今年度は、私にとっては初めての経験である、集団遊戯療法を研究課題に取りあげ、その実施を試みた。この報告は、まず、集団遊戯療法の理論的根拠を明らかにするための文献研究と、その試みの段階における実践の経験をまとめたものである。

就学前の幼児や小学校低学年の子どもに適用される集団遊戯療法は、いわゆる問題児の治療法としてだけでなく、幼児の集団指導を考えるうえにも、多くのすぐれた示唆を与えてくれるものであらうと考える。

I 集団遊戯療法について

1 集団遊戯療法の原理 —— 個人遊戯療法との類似点，相違点 ——

これまで、当教育センターの教育相談で実施してきた、小さい子どもに対する心理療法は、主として、来談者中心（Client-Centered）の立場による個人的な遊戯療法であった。その原理は、カール・R. ロジャースが発展させた来談者中心的（非指示的）カウンセリングの技術にもとづいているもので、人間の能力に関する次のような基本的な仮説から導かれているものである。すなわち、個人の内部には、より成熟した行動をとろうとする成長への衝動や、自分の問題を自ら解決できる能力がひそんでいて、個人の自助の資質への限りない信頼である。個人の自己指示的な資質は、それを心底から尊重する人間関係——あるがままの個人を受け入れる、あたたかで、親密な関係、評価もくされず、矯正の圧力も加えられない、真の自己になれる、おおらかな関係——の中ではぐくまれ、伸展していくものである。遊戯療法は、遊びを媒介に、子どもに、このような関係を体験させる機会を提供するもので、この体験をとおして、子どもは、自分の真の気持ちを解放し、表面化して、自分の問題を直視し、それについて自分で考え、判断し、自分で決定をくだす、そして、いっそう、心理的に成長をとげることができるようになるのである。治療とは、この過程を助けるものであって、したがって、治療の進行は、その人の人格が成長していく場であるといえる。そして、治療者は、子どもが、このように自分の問題を自ら解決できるよう、その心理的成長がとげられるよう、子どもを援助する、援助者の立場にある。治療

者の基本的態度の指標として、V. M. アクスラインのあげた8つの基本原理 — ①ラポートの確立、②子どもを完全に受け入れること、③おおらかな感情をつくりあげること、④感情の認知と反射、⑤子どもに尊敬心をもちつづけること、⑥子どもが先導する、⑦治療はせかせせられない、⑧制限の設定 — は、治療者のこのような立場を示すものである。

以上のような来談者中心療法の間観や人格の成長に対する考え方、および治療原理は、そのまま集団にも適用されるもので、したがって、集団遊戯療法は、この基本的な点に関して、個人の遊戯療法と似ているのであるが、まったく異なる点もある。

異なる点は、個人遊戯療法では直接には2人の人（子どもと治療者）の関係があるだけだが、集団遊戯療法では、数人の子どもたちが治療過程において、相互に影響し合うという重要な事実から生まれてくるものである。このことは、ニコラス・ホブbsがいうように、個人遊戯療法がそのままの形で数人の人に拡大すること以上の意味があるのであって、独特な、治療的な、質的に異なった経験を与えるものである。治療者に理解され、受け入れられることは、確かに大切なことではあるが、しかし、集団の仲間によって理解され、受け入れられることは、もっと力強い経験である。集団のメンバーの相互交渉の経験が、新しい、より満足な人間関係のあり方を見いだす具体的、直接的機会を与えるということ、また、そのような経験をとあして、自己を見直し修正していくことができるということも、その特質の1つである。さらに、集団の場合は、個人は援助の受け手であるばかりでなく、援助の与え手ともなることで、これも、治療過程において重要なものとされる。このことを、ホブbsは次のように要約している。「集団療法によって、人は、与えることと受けることの、すなわち、自己の独立と現実的な自己を失わない他人への依存との間の、成熟した均衡を達成することができるのである。」

さらに、集団遊戯療法における独自の治療的機能については、ヘイム・G・ジノットが次のように述べている。すなわち、治療的なはたらきをする要素として、①治療関係の結合、②カタルシス（浄化）、③洞察、④現実検証、⑤昇華の5つが重要であるとし、集団遊戯療法においては、それらが、いっそう効果的にはたらくというのである。幾人かの子どもの存在は、治療者が子どもと望ましい関係を結ぼうとする（治療関係の設立）とき促進的なはたらきをする。他の子どもの存在が、その子の緊張を柔らげ活動や参加を誘うのである。さらに集団は、多面的関係づけの機会をはらんでおり、子どもは、自分を治療者に同一化するばかりでなく、集団の他のメンバーとも同一化する。また、仲間の存在は、子ども自身の気持の解放をいっそう容易にする（カタルシスの効果）。いろいろな子どもで構成された集団の経験は、考え方や感じ方の相互の刺激により、深い洞察を表面にもちきたす（洞察の達成）のにも力がある。子どもたちは仲間の反応に照らして、自分の行為を再評価することができるからである。そしてまた、いろいろな子どもの存在は、そこでの治療の体験を、社会の現実と結び合わせることに役立っている。彼らは、そこで新しい、より満足のいくし方で仲間と関係を結ぶことを発見し、それをためすことができる（現実検証の機会）。さらに、集団による遊戯療法は、いろいろなものを使い、いろいろな活動に参加する方法を、子どもどうし互いに教えあう。これにより、各々の子どもは、一次的衝動を社会的に認められる形におきかえる方法を発見し（昇華の発見）、その吐け口を増していくのである。

集団のメンバーが相互に影響し合い、それが、治療をいっそう効果的なものにするという事実、これが、集団遊戯療法を、個人遊戯療法から区別する本質的な相違点であるといえよう。

2 集団遊戯療法の方法 —— 集団のメンバー選択と構成について ——

集団遊戯療法の具体的な方法を述べる場合、治療関係の構成（治療関係のもつ独自の性質を子どもに伝えていく過程）や制限の設定、あるいは、治療者の役割などについても触れなければならないのであるが、これらは、個人の遊戯療法と大差ないので省略することにし、ここでは、特に、集団遊戯療法の効果に影響の大きい集団のメンバー選択と構成について、シノットの提案にもとづいて述べておこう。

まず、集団遊戯療法に適する子どもの選択については、社会的飢餓の発達程度が根本基準にあげられる。社会的飢餓というのは、仲間から受け入れられたい、集団の中で地位を得て、それを保持したいという人間の欲求である。仲間から受け入れられることにこたえて、子どもは、自分の行為を変えようと望むようになる。この欲求は、母親（あるいは母親にかわる人）と子どもとの間の初期の関係体験の中から生まれ、はぐくまれてくるもので、乳幼児期に、社会的飢餓を発達させるに充分な母親の保護を体験している子ども、したがって、社会的飢餓をもっている子どもは、集団遊戯療法の適用に適格なものとされる。具体的に子どもの示す型をあげると、引っこみ思案の子ども、未成熟な子ども、恐怖反応を示す子ども、男らしくない少年、良い子ぶった子ども、習癖異常の子ども、行動異常の子ども、などである。

次に、集団の構成については、集団遊戯療法の効果が、メンバー間の調和的な組み合わせに大きく依存しているだけに、多面的な考慮が必要とされる。その1つは、遊戯療法で、子どもたちは、お互いに矯正的な影響を及ぼし合うような集団の体制の中にあるという事態を考慮することで、それぞれの子どもが、仲間の中から同一化できるモデルを発見し、自分を補う機会がもてるように、メンバーを組み合わせることが大切である。また、集団に適度の緊張が生まれるように、静かな子どもと攻撃的な子どもを適当に組み合わせ、調和のとれた構成にすることも必要であろう。活発な遊戯集団の中に、強度の障害のない、行動に統制力のある1人の子どもを入れることも、ほかの子どもに中和的な影響を及ぼすので効果的である。しかし、治療場面の外で、お互いに関連をもっている子ども（級友や兄弟）を、同じ集団に入れるのは望ましくない。また、外界の生活で受けてきた嘲笑を、再び受けるような集団には、子どもをおいてはならない。集団内の関係は、怖れから解放されて、自由なものでなければならない。反社会的な子どもが、集団の支配的な像とならないように、特別な注意をはらうことも必要である。つまり、治療集団は、メンバーが互いに及ぼし合う影響を考えて、注意深く計画され、治療の中で、子どもたちは、外界の生活の有害な影響から守られていなければならないということである。

遊戯治療集団の扱う子どもの数は、5人をこえないことである。また、同じ集団に属する子どもは、12か月以上の年齢の差はない方がよいが、子どもの社会的成熟の程度が、年齢に優先することもある。知能程度においては、均一である必要はない。性別についての考慮は、年長児は、同性集団におくのが好ましいが、就学前の年少児は、遊戯療法で特に性を区別する必要はなく、むしろ、男女混合の集団におくことによって、利点のでてくる場合も多い。概して、遊戯集団は、新しい子どもが適当なときに組み入れられる開放集団となる傾向が強いが、メンバーの入れかわりについては、充分な配慮が伴わなければならない。この点について、S. R. スラブソンは、治療開始後は新しいメンバーを加えない閉鎖集団をすすめている。

Ⅱ 集団遊戯療法の実施

—— 社会的適応の困難な幼児について ——

1 目 的

当教育センターの教育相談に来談する幼児の問題はいろいろであるが、その中で、比較的目につくのが、幼稚園、保育園などの集団生活にうまく適応できないという訴えである。心理的、情緒的なものに起因しているものであれば、どのような問題の幼児についても、これまでは、個人的な遊戯療法を行ってきたのであるが、このような社会的適応に問題をもつ幼児については、むしろ、集団遊戯療法の方が、より有効であろうことは、理論的にも肯定できる。そこで、このたび、社会的適応に困難を訴える幼児を集め、そのグループに、集団遊戯療法を試みることにしたのである。したがって、その目的としたのは、社会的適応の困難な幼児が、集団遊戯療法により援助を受け、その適応が、少しでも改善されるようにする、ということである。そして、このことは、主として、集団遊戯療法の治療過程を、次のような観点から検討することにより、確かめていきたいと考える。

①集団遊戯療法において、集団という状況が、それぞれの幼児に、どのような影響を与えるか。

②治療の進行につれて、上記のことが、幼児の行動に、どのような変化を与えるか。

2 方 法

1) 対象児

当教育相談部に来談している幼児のうちで、問題が社会的適応とからんでおり（精神科医の診断により器質的疾患は認められない）、日常生活でお互いに交渉のない、同年齢の幼児（4～5歳の男児）4人を選び、集団を構成した。対象児の特徴、家族構成および主訴は、次の表のとおりである。

表1 対象児の特徴、家族構成および主訴

幼 児	生年月日	特 徴	家族構成	主 食
I.S児	昭和38年 9月15日	偏食 こわがり 言語不明瞭	父(33才) 母(31才) 兄(小1)	○はじめての所に不なれで泣き叫ぶ。 ○幼稚園の生活にうまく適応できないでやめさせられた。 ○ことばがはっきりしない。○柱時計をこわがる。
I.T児	昭和38年 6月18日	こわがり	父(40才) 母(39才) 姉(小2)	○ことばの発達のおくれ ○友だちとうまく遊べない。
N.K児	昭和38年 11月15日	吃音 言語不明瞭 こわがり 依存的	父(38才) 母(35才) 兄(小2) 妹(2才)	○最近食べるようになり、口数が少なくなった。発音が不明瞭 ○幼稚園では、ひとりで過ごすことが多い。
T.T児	昭和39年 2月5日	こわがり はずかしがり 動作がのろい	父(36才) 母(32才) 姉(小2) 弟(1才)	○保育園で先生や友だちと話をしない、集団行動がとれない。 ○何事も自分からしようとししない。

2) 治療者および治療方法

集団遊戯療法の治療者には筆者があたり、先に述べた理論に基づき、できるだけ児童中心（来談者中心）の立場にそのような遊戯療法を行なった。（場所は、当教育相談部の遊戯室）

3) 治療の回数と期間

昭和43年10月7日から同年12月16日までの期間、毎週月曜日の3時頃から30分間、計11回の集団遊戯療法を実施した。

4) 諸検査

集団遊戯療法の効果を客観的に把握するために、治療開始前と治療終了後に、社会成熟度診断検査、および、乳幼児精神発達質問紙を、それぞれの子どもの母親に記入してもらった。

5) 観察記録と整理

集団遊戯療法の行なわれた全時間をテープに録音し、治療終了後、直ちに、その録音と筆者の体験・観察を再生させて、治療中の子どもの行動を、下記のような用紙に記録した。具体的に記録された子どもの行動は、さらに、表2に示した行動分類表にしたがって記号化し、子どもの行動の移り変わりが、大ざっぱに把握できるようにした。

行動分類のカテゴリーは、次のような観点から設定したものである。すなわち、治療をすすめるうえで、基本的要素となるのは、子どもと治療者との関係であるが、集団遊戯療法の場合は、子どもと治療者との関係だけでなく、集団を構成している子どもどうしの相互関係が重視されなければならない。したがって、集団遊戯療法の治療過程において、子どもの行動は、誰ともかかわりをもたない行動(単独行動)は、治療者とかかわりをもつ行動(対人行動①)へ、さらに、集団の仲間とかかわりをもつ行動(対人行動②)へと、関係の拡大されることが期待されるし、その対人行動は、受動的・消極的行動から、能動的・積極的行動へ(a, b, c → A, B, C)、また、非建設的な行動から建設的な行動へ(a → b → c, A → B → C)と、発展することが期待されるとするのである。つまり、こうした子どもの行動の変化をとおして、子どもの社会的な成長をとらえようとするものであり、また、集団遊戯療法の治療過程や効果を検討しようとするものである。

表2 行動分類カテゴリー表

単 独 行 動	対人行動①(①に対する行動)	対人行動②(メンバーに対する行動)
a…逃避 b…孤立, 傍観 c…ひとり遊び, 並行遊び d…関心ある行動	a ₁ …拒否, 反抗, 否定的行動 b ₁ …依存的, 服従的行動 c ₁ …消極的, 受動的協同 (d ₁ …応答) A ₁ …攻撃, 競争, 批難 B ₁ …支配, 指導, 命令, 指示, 要求 C ₁ …積極的, 能動的協同	a ₂ …拒否, 反抗, 否定的行動 b ₂ …依存的, 服従的行動 c ₂ …消極的, 受動的協同 d ₂ …応答 A ₂ …攻撃, 競争, 批難 B ₂ …支配, 指導, 命令, 指示, 要求 C ₂ …積極的, 能動的協同 D ₂ …質問

(集団遊戯療法記録用紙)

第 回 月 日

メンバー 時間	I.S 児	I.T 児	N.K 児	T.T 児	
分 0					

3 経 過

1) 各回の治療経過

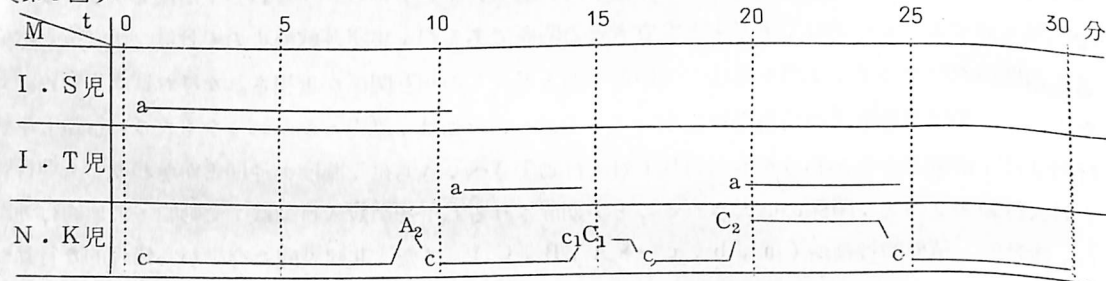
対象児が、集団遊戯療法に参加した回数は表3に示したとおりである。次に各回の全体的な治療経過を示すが、ここでは、個

表3 対象児の出席表

○……出席
(○)……来談はしたが遊戯室に不参加

回数 月日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	出席 回数
幼児	10.7	10.14	10.21	10.28	11.4	11.11	11.18	11.25	12.2	12.9	12.16	
I.S児	○	○	○	×	○	○	×	×	(○)	(○)	×	7
I.T児	○	○	○	×	○	○	×	○	○	○	○	9
N.K児	○	×	×	○	○	×	○	○	×	○	○	7
S.T児	×	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	8

<第1回>



○I.S児は、母親にしがみついて泣いていたが、母親からはなされP室（遊戯室）に置いていかれると、ドアのところで激しく泣く(a)。力づけるために近づいた㊦（治療者）の手をしっかりと握り、時々柱時計をふりかえって、じだんだふみ、あるいは、ドアをたたいて泣き続けたが、10分ほどして、I.T児が入室するのと入れかわりに室を出てしまう。

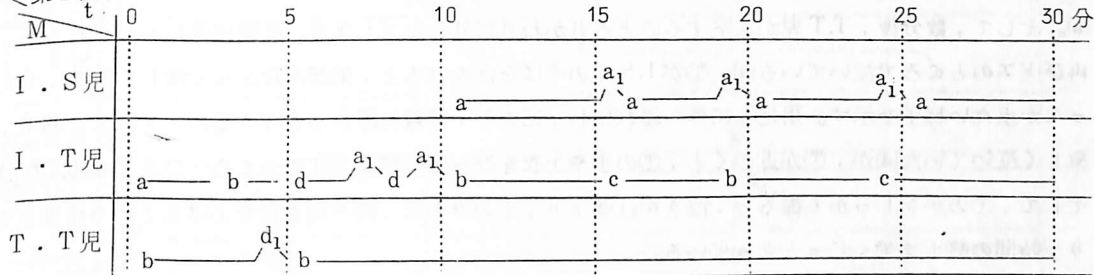
○I.T児は、10分ほどおくれで、以前の担当者㊦kと入室。先に入室していたN.K児や㊦をみていたが、やがて泣き出し(a)、P室から出ていってしまう。数分後、母親といっしょに再び入室したが、泣き続け(a)、N.K児のかける電話を受けるよういわれて、いっそう激しく泣く。数分後、ひとりでP室を出ていき、母親のいる面接室にもはいらず、ホールで㊦kと時間終了までいる。

○N.K児は、泣いているI.S児をみていたが、㊦が案内すると、先に立ってP室にはいり、砂場にはいっていいかどうか㊦に聞いて、すぐに砂いじりをはじめ(c)。数分後には、パトカーに乗ったり、ママゴトの洗濯機を動かしたりするが、泣いているI.S児をみて「泣き虫毛虫」とあざ笑う(A₂)。電話をひとりでかけたり、㊦のかける電話を受けたり(c₁)するが、刀をとりあげると、㊦に切りかかってきて、刀の切り合いとなる(C₁)。2度目にはいつてきたI.T児に、電話をかけ「しなよ、お友だち」と誘う(C₂)。が、反応が得られない。電話遊びをやめ、㊦に使い方を聞きながら、パチンコ遊びを時間終了までする。

○(㊦の行動)第1回目に、全員そろってP室に案内することができなかったが、N.K児、I.S児に、お友だちがいっしょであることを伝え、時間終了まで自由に遊ぶよう話す。しかし、I.S児の激しい泣き声と、I.T児にしっかり手を握られたことで、㊦自身の心身の自由が制限され、また、続いて入室し

た I.T 児の泣き声にも圧倒されるようなかたちになって、治療の困難を痛感した初回である。

<第2回>



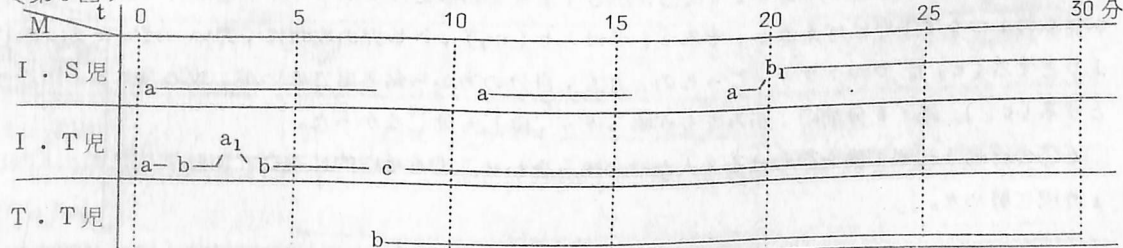
○I.S 児は、10 分ほどおきて、泣きながら、母親にひっぱられるようにして入室。母親が去ると、㊦の片手をしっかり握り、片手をドアのハンドルにかけさせ、顔を㊦の上衣にかくして泣く(a)。時々、柱時計をふりかえって、さらに力を入れて泣く。㊦が出しておいたトラックを、すばやく棚に片づけたり(a₁)、紙片をひろいあげて、ボールに投げたりする(a₁)が、また、もとの状態にもどり、緊張して泣き続ける。終了近くになって、㊦が、無理に I.S 児の手をはなし、ボールをつくと、そのボールを取りあげて、ボールに投げつける(a₁)。そして、はねかえってきたボールを、棚に片づけてしまい、泣き続ける。

○I.T 児は、母親といっしょに入室。母親が去ると、泣き出し(a)、P 室を出てしまう。再び連れもどされ、入口のところに立って、時々泣き声をあげながら、持参したアメをなめている(b)。㊦が怪獣のおもちゃを棚から出し、テーブルの上に並べると、近よって、そっと手を触れてみる(d)。しばらくして、アメの箱をひきちぎって投げつける(a₁)。㊦が I.T 児と T.T 児に話しかけると、㊦のことばに笑う(d)が、㊦がスリッパを足元にそろえてやると、足で押しやる(a₁)。I.S 児の泣くのをみて、時々泣き声をあげながら立っていた(b)が、数分後、怪獣を動かして遊びはじめる(c)。しばらくして、窓のところへ寄り外を眺め(b)、それから、パチンコをはじめて遊ぶ(c)。

○T.T 児は、㊦の案内で入室。I.T 児の泣くのをきげんそうにみながら、室内をあちこち歩きまわる(b)。㊦が話しかけると、かすかにうなづく(d₁)。両手をスモックのポケットにつっこみ、床をすべるように歩きまわる。I.S 児が入室してからは、I.S 児の泣くのを、時々チラッとみたり、I.T 児の行動をじっとみていたりする。I.T 児が外を眺めているとき、T.T 児も並んで外を眺めていたが、I.T 児が近づくと背を向けて歩き出す。I.T 児のパチンコ遊びを、少しはなれたところから、じっとみていたりする。

○(㊦の行動)初めて顔を合わせる I.T 児と T.T 児を P 室に導入。㊦の方から怪獣のおもちゃを出して 2 人を遊びに誘うが、受け入れられない。I.S 児が入室してからは、㊦の行動は、I.S 児にくぎづけされる。

<第3回>



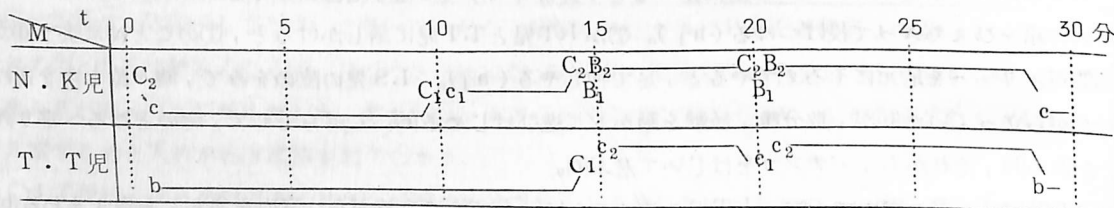
○I.S 児は泣いて、激しく抵抗していたが、母親がなだめながら、無理にP室に入れる。P室に入れられたI.S 児は、ドアのところで㊦の手をしっかりと握り、片手でドアをドンドンたたきながら激しく泣く(a)。そして、数分後、T.T 児が入室するのと入れかわりに外へ出てしまう。母親に連れもどされると、再びドアのところで泣いている(a)。㊦がI.S 児のそばをはなれると、地だんだふんで激しく泣き、おしっこが出たい様子を示す。用足しに外へ連れ出し、三たび、母親に連れられて入室。ドアのところで、激しく泣いていた(a)が、㊦が近づくと、㊦の手や上衣をひっぱって、ドアのところへひきよせる(b₁)。そして、㊦の手をしっかりと握ると、泣き声は弱まり、そのうちに、時々泣き声をあげるという程度になり、時間の終了まで、じっと立っている。

○I.T 児は泣いてP室にはいりたがらなかったが、母親といっしょに入室。母親が去ると、I.T 児も後を追って出る(a)。母親に連れもどされると、入口のところに立って、時々泣き声をあげている(b)が、㊦がテーブルの上に出した怪獣のおもちゃを床にたたき落とす(a₁)。I.T 児をみて、思い出したように泣き声をあげる(b)が、やがて、㊦にしゃべりかけながら、自動車を棚から出して遊びはじめる(c)。

○T.T 児は数分おくれて入室。I.T 児をチャラチャラとみながら室内を歩きまわる。I.S 児の激しい泣き声には耳をふさぎ、I.S 児、I.T 児の方を時々みながら、床をすべり歩く。時々、I.T 児の遊んでいるそばに寄っていくが、また、すぐにはなれて、ひとりて歩きまわっている。

○(㊦の行動) I.S 児が2度目に入室してから、㊦は、I.S 児のそばをはなれて、距離をおいて見守ろうとしたが、I.S 児の激しい興奮に、それもできないでしまった。

<第4回>

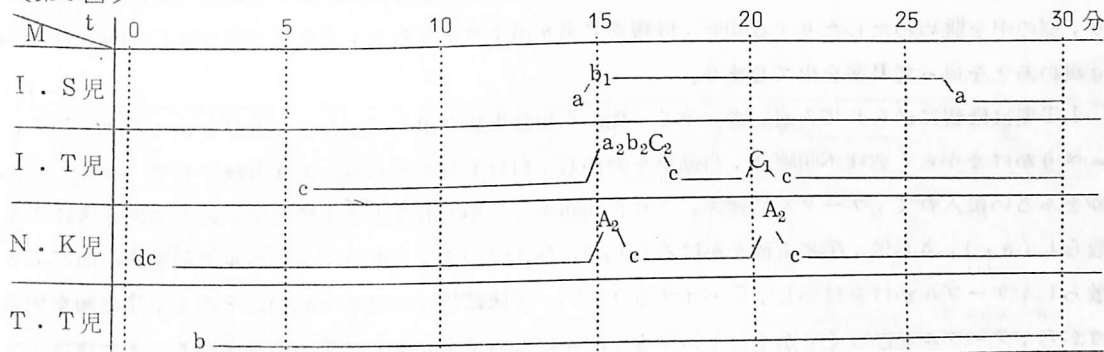


○N.K 児は、いっしょに入室したT.T 児に「あんた遊ぼうよ」と誘う(C₂) が、反応がないので、ひとり遊びをはじめる(c)。㊦にしゃべりかけながら、パトカーや二輪車に乗る。10分ほどして、電話をとりあげ、㊦と電話ごっこ(C₁c₁)。少しして、怪獣ごっこをしようと提案(C₂)。T.T 児と㊦に怪獣ごっこの役割を指示し、遊びをリードする(B₁B₂)。数分して、今度は、ウルトラマンごっこを提案(C₂)。N.K 児自身がウルトラマンの役をとり、遊びをリードする(B₁B₂)。時間終了間際、「ちょっとタイムして」といって砂場にはいり(a)、終了する。

○T.T 児は、N.K 児といっしょに入室。N.K 児の誘いに反応を示さず、N.K 児の動きをみながら、室内を歩きまわる(b)。㊦が遊びに誘っても反応を示さず歩きまわるだけであったが、怪獣ごっこのとき、㊦が怪獣の1つをT.T 児に与えると、そろっと受けとり(c₁)、N.K 児の攻戦に、力いっぱいたえ、応じようとする(c₂)。ウルトラマンごっこのときも、自分の方から動き出さないが、攻められると防ごうとする(c₂)。終了5分前頃、かみなりが鳴ったが、少しも動じなかった。

○(㊦の行動) 初めて顔を合わせる2人だけの組み合わせ。㊦も積極的に遊びに加わり、レポートのじょう成に努めた。

<第5回>



○I.S児は、母親がP室に誘い入れようとするが、泣いてはいらず、時間の前半、廊下で過ごす。その間、母親の方がP室にはいり、いろいろなおもちゃをみせて、I.S児にはいるよう誘う。I.S児は、廊下から、時々ぞいておもちゃを眺めたりするが、はいろうとしない。時間の中頃、母親にP室に入れられ、戸が閉められた。そのとたん、激しく泣き(a)、㊦の手をしっかりと握ってはなさない(b₁)。その後は泣き声もだんだん弱まり、時々泣き声をあげる程度から、ほとんど泣き声をあげないようにまでなった。しかし、終了近くになって、㊦がI.S児から無理にはなれると、再び、激しく泣き続けた(a)。

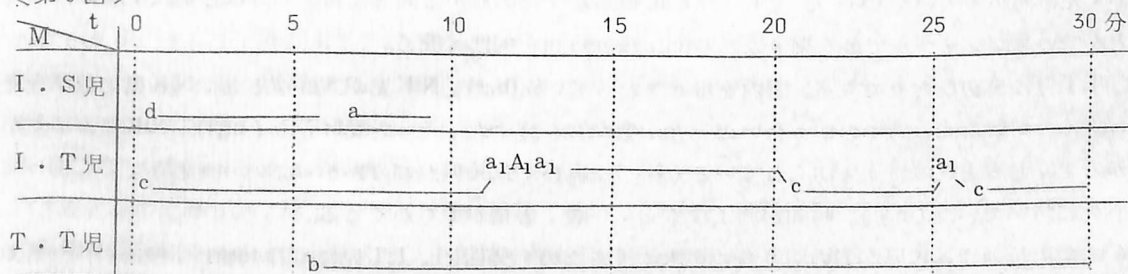
○I.T児は、5分ほどおくれで入室。自動車類を棚から出して、ひとり遊びを続ける(c)。時間中頃、砂場にいて、N.K児が砂を入れたトロッコをひっくりかえす(a₂)。これに、N.K児が抗議すると、驚いたように、トロッコを手放す(b₂)。そして、そのトロッコに砂を入れてやる(C₂)。その後、N.K児のまねをして、砂場から石を拾って、㊦にみせたりする(C₁)が、やがて、砂場から砂を運んでトラックに積む作業を終了まで続ける(c)。

○N.K児は、入室と同時に、㊦にいろいろしゃべりかけながら、何して遊ぶかさがす(d)。そして、パトカーにしばらく乗り(c)、そのあと、砂場で砂遊び。トロッコに砂を入れておくと、I.T児がきてひっくりかえしたので、「何するんだ」と抗議する(A₂)。しばらく、I.T児を、ことばで非難した後、I.T児を相手にせず、ひとり遊びを続けながら(c)、㊦にいろいろしゃべりかける。I.T児が石を拾って㊦にみせると、「そんな石」とけなす(A₂)。終了まで砂遊び(c)。

○T.T児は、2～3分おくれで入室。室内を歩きまわったり(b)、N.K児の遊びをみていたり、N.K児とI.T児のかかわりを驚いたように見守る。

○(㊦の行動)グループのメンバーが、はじめて全員そろった回。I.S児入室以後、㊦の自由な行動は制約されたが、それぞれの子どもの象徴的な行動を同次元で観察することができた。

<第6回>



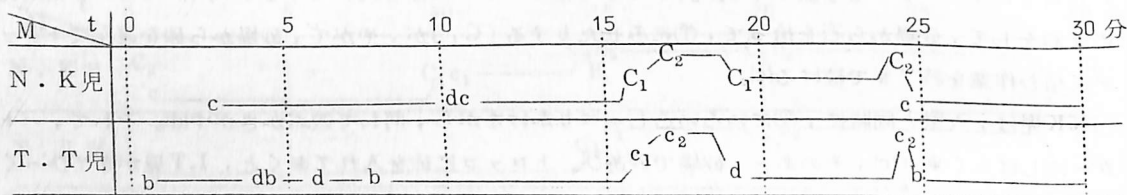
○I.S 児は泣きながら、母親といっしょに入室、しばらく母親のそばで、I.T 児の並べた自動車をみたり、室の中を眺めわたしたりする(d)が、母親がP室を出ようとする、ぐすぐす泣きはじめ(a)、ついに、母親のあとを追ってP室を出てしまう。

○I.T 児は母親に送られて入室。さっそく、棚から自動車類を出して、ひとり遊びを始める(c)。㊦にしゃべりかけながら(意味不明瞭)、自動車を動かし、自分も動きまわる。10分ほどして、砂場へいき、砂をふるいに入れて、テーブルに運ぶ。これを何回かくりかえしたあと、テーブルの上の砂を床にまき散らし(a₁)、さらに、㊦にも砂をかける(A₁)。ひきつづき、今度は、シャベルで砂を床一面にまき散らし、テーブルかけをはがし、「パイする」といって床に投げつける(a₁)。その上、㊦の顔を伺いながら、テーブルをひっくりかえし、いすも、次々にひっくりかえして笑い声をあげる。その後は、マゴト道具のひとつひとつに砂を入れる作業をくりかえす(c)が、途中、㊦が自動車を動かそうとすると「ダメ」と制止し、㊦がI.S 児のためにあけておいた戸を、わざと閉めてしまう(a₁)。

○T.T 児は、5分ほどおくらせて入室。I.T 児が遊ぶのを眺めていたり、窓から外を眺めたり、室内を歩きまわったりする(b)。I.T 児が砂をまき散らしたり、テーブルやいすをひっくりかえしたりするのを驚いたようにみつめていた。

○(㊦の行動) I.S 児をP室にひきとめるために働きかけたり、I.S 児がいつでもP室にはいれるように戸をあけておいたりする㊦の態度を、I.T 児が敏感に感じたようで、㊦の注意をひくような否定的行為が展開された。

<第7回>



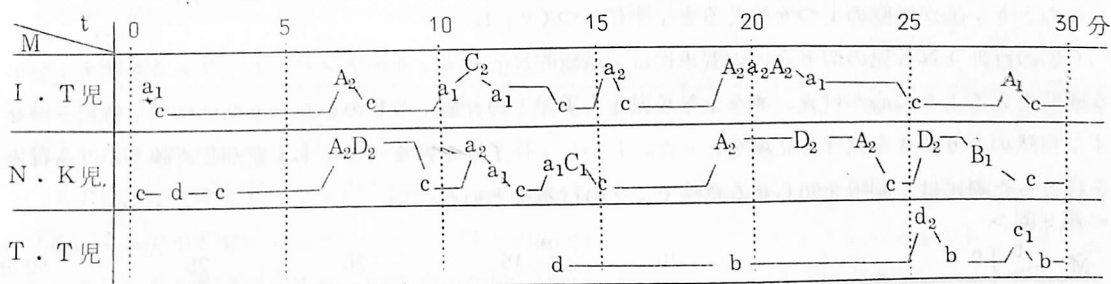
○N.K 児は、2～3分おくらせて入室。すぐに砂場にとんでいって、シャベルで砂ほりを始める(c)。時間がまだあるかどうか㊦に熱心に聞いて、砂場から出ると、パチンコ遊び。㊦にその使い方を聞いて、しばらく遊ぶ。「やめた」といって、今度は、黒板に何やら書きつける。それもすぐやめ、「何で遊ぼうかな」とおもちゃを物色して歩き(d)、「かっこいい」の声をあげて、鉄砲をとりあげると、しばらく、それをうっている。次に、刀をとりあげ、㊦に切り合いをしようといっ、思い切りついてくる(C₁)。㊦がやられると、T.T 児に刀を向ける(C₂)。しばらく、㊦との切り合いをやり(C₁)、最後に再び、T.T 児に向かっていく(C₂)。そして、㊦に時間がまだあるかと聞き、終了5分ほど前に、急に砂場にとんでいき、シャベルで砂を堀りながら(c)、残り時間を何度も聞く。

○T.T 児は最初ひとりで入室。室内を歩きまわっていた(b)が、N.K 児が入室すると、N.K 児の遊びをそば近くみている(d)。刀での切り合いのとき、㊦が刀を渡すと、そっと受けとり(c₁)、N.K 児が切りかかると、じっと立ったまま切られている(b₂)。再び、N.K 児が切りかかっていったとき、刀を握って必死に防いでいた(c₂)。時間が終了すると、一瞬、表情が柔らくなる。

○(㊦の行動) N.K 児が刀の切り合いを求めてきたのを契機に、T.T 児にも刀を渡し、仲間にはいれる

ように配慮した。㊦が「やられた」ことにし、N.K児とT.T児のかかわりがもてるよう促す。

<第8回>



○I.T児は、N.K児といっしょに入室。すぐに、おもちゃかごのところへいき、人形をとり出して、㊦に何かいいながら、人形の首をもいで投げつけて笑う(a₁)。そのあと、㊦にさかんにしゃべりかけながら自動車で遊ぶ(c)。数分後、砂場へいき、N.K児のシャベルを取りあげる(A₂)。バケツの砂を「キレイキレイする」といって、二輪車の車輪にかけたり、その二輪車に乗ったりするが、やがて、それを砂場に押し倒す(a₁)。シャベルをN.K児にわたそうとする(C₂)。クレヨンを出してきて、ばらまいたり、投げつけたりして、㊦をみて笑う(a₁)。大声をはりあげて歩きまわる。ママゴトを出して並べる(c)。N.K児がトラックに手を触れると「ダメ」といって取りあげようとする(a₂)。N.K児が「ひとつだけかして」というと、「いやだよ」というが、それを取りあげるのはやめて、他のトラックで遊ぶ(c)。N.K児が入れたトラックの砂をすくっていくと、N.K児が非難する。それに対して、大声をあげ、N.K児に砂をかける(A₂)。そのあとも、「ヤロー」「ダメ」「イヤイヤ」などといいながら、砂をとりに行く(a₂A₂)。そして、㊦の顔を伺いながら、砂を床にまいて笑う(a₁)。それから、さらに、いすをひっくりかえして笑う。その後は、ママゴトに砂を入れて運ぶ作業を続ける(c)が、途中、㊦に砂をかけて笑う(A₁)。

○N.K児は入室すると、すぐ二輪車に乗る(c)。それから、しばらく、おもちゃを物色(d)。結局、砂場においてシャベルで砂ほり(c)。I.T児がきて、シャベルを取りあげると、抗議をする(A₂)が、そのあと、I.T児に、「何歳だ?」とくりかえし聞く(D₂)。I.T児の返事がないままに、ひとり遊びを続け(c)、I.T児がシャベルをわたそうとすると、「もういらないよ」と拒否(a₂)し、ふるいの砂を頭からかぶる(a₁)。㊦の出してやった紙に何やら書きつけていた(c)が、すぐに「やめた」といい、サンドバックを力いっぱいたたく。それから、刀をとりあげ、㊦に切り合いを求める(C₁)。これも、すぐに「やめた」といって放り出し、トラックで遊ぶ(c)。トラックを砂場にもって行って砂入れ。I.T児がその砂をもっていくと、「なにー、ひとの」「ドロボーなんが」と非難し(A₂)、I.T児が砂をかけると、砂をかけかえす。そして、再びI.T児に「何歳だ?」とくりかえし聞く(D₂)が、反応がないので「バカ」という(A₂)。終り頃、電話遊び(c)。今度は、T.T児に「Tちゃん何歳だ」と聞き(D₂)、答がないと手で示し「5歳」と聞く。T.T児がうなずくと、「ボクも5歳」と、三たび、I.Tにも年齢を聞く(D₂)。そして、「5歳の中でボクが一番強い」と㊦に胸をはってみせる(B₁)。そして、怪獣ごっこ、ボクシングなどを少しやり(c)、終了。

○T.T児は10分余りおくれて入室。I.T児、N.K児の遊びをみながら、おもちゃ棚の前を活発にあら

こち動きまわり、おもちゃをのぞきこんだりして熱心にみる(d)。I.T児とN.K児のやりとりには、立ったまま、じっとみていた(b)。N.K児が年齢を聞くのに、手で示すと、弱々しくうなずく(d₂)。怪獣ごっこのとき、㊦が怪獣の1つを与えると、手にもつ(c₁)。

○(㊦の行動) N.K児の切り合いの要求には、積極的に応ぜず、他のメンバーのバランスを考え、公平な態度をとるように心がけた。また、N.K児とI.T児との非難、攻撃のかかわり合いには、特に干渉せず、自然のなりゆきを見守る立場をとった。しかし、終了近くになって、I.T児が㊦に砂をかける行為を行なった際には、制限を知らせる意味で、その行為をとめる。

<第9回>

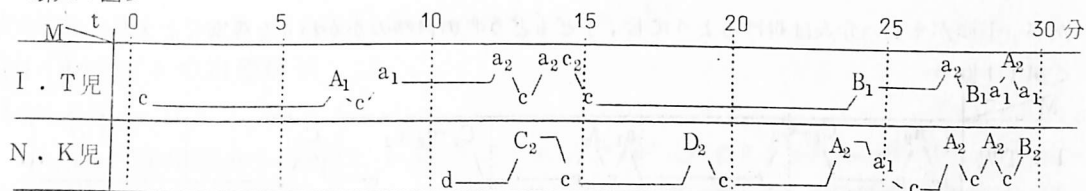
M \ t	0	5	10	15	20	25	30分
I.T児	c	a ₁ —c	a ₁ —A ₁ —a ₁ —c ₁ —a ₁ —c	B ₁ —c		A ₁ —c	
T.T児			b		d—b		d

○T.T児は、自動車類を並べたり動かしたり、二輪車に乗って室内を一周したりしながら(c)、㊦にさかんにしゃべりかける。二輪車、三輪車を砂場に押し倒し(a₁)、パトカーに乗る(c)。それから、大声をあげながら、人形かごをひっくりかえし、おもちゃかごをひっくりかえして、おもちゃを床にまき散らす(a₁)。そして笑い、歓声をあげる。さらに、サンドバックを㊦にぶっつけて笑う(A₁)。また、テーブル、いすをひっくりかえして笑う(a₁)。㊦がいすをひっくりかえすのをとめると、いすをおとし、テーブルもおこて隅によせる(c₁)。テーブルの上に汽車をのせ、長くつなぐ(c)。その汽車を床に払い落とし、また笑う(a₁)。電話をひっくりかえして、りんが鳴りやまないの、㊦を電話のそばにひっぱっていく(B₁)。再び、テーブルをひっくりかえそうとするので、㊦がとめると、汽車や自動車を動かして遊ぶ(c)。その自動車をプールの台の上で走らせ、その荷台にのせたおもちゃを、床の上に、また㊦の手の甲の上に落とすことをくり返す。その間、㊦にさかんに話しかけ、時には大声をあげる。終り頃、笑いながら、㊦の足をわざとふみつける(A₁)。

○T.T児は、10分ほどおくれて入室。ちょうど、I.T児が、否定的な行為を展開しているところに出合わせ、驚いたようにみていた(b)が、床いっぱいに散らかったおもちゃの間を通りぬけ、窓側に寄る。I.T児が、サンドバックを㊦に打ちつけている様子もじっとみつめていた。その後は、室内を自由にかけまわる。おどるようなかっこうでとんだり、ポーズをとったり、走ったりなど。I.T児の自動車遊びをそば近くよってきて、からだをかしげるようにしてのぞきこむ(d)。終了間際、床の上に放置されていた自動車を、自分の足でそっと触れてみる(d)が、㊦がそれで遊んでいいといっても、手にとろうとしない。

○(㊦の行動) I.T児の否定的行為は、㊦への攻撃や物品の破損のおそれのある行為を2, 3制限したほかは、全面的に受け入れる。I.T児とT.T児のかかわりをもたせる契機を見いだせずにしまった。

<第10回>



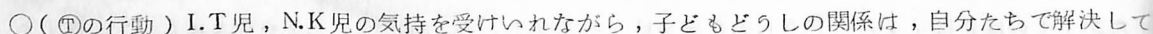
○I.S 児は泣いてP室にはいりたがらないが、母親が無理に連れてはいる。しかし、すぐに、母親の手をすりぬけあ外へ出てしまった。(図表略)

○I.T 児は、入室すると、すぐに棚から自動車類を出してひとり遊び(c)。ひこうきを㊦に示して話しかける。I.S 児がP室から出ていくと、入口の戸を閉めてしまう。さかんにしゃべりながら、おもちゃをあれこれ、とりあげてみるが、砂場に行くと、バケツに砂を入れ、二輪車の車輪にかける。それから、その二輪車に乗る。㊦にさかんにしゃべりかけたり、㊦に砂をかけて笑ったりする(A₁)。二輪車を入口のところに乗りすてると、汽車を箱からあけて床にばら散き、電気のスイッチをつけたり、消したりして笑う(a₁)。そして、おもちゃかごを床にあげ、おもちゃを床一面に散らかす。N.K 児が入室して、自動車に手を触れると、それを取りあげてしまう(a₂)。N.K 児が、二輪車に注意を向けると、急いで二輪車に乗る。N.K 児が、その二輪車の後にのせてくれるよういうと、「ヤーラ」と拒否する(a₁)、㊦の仲介で、二輪車の荷台にN.K 児のをせてこぐ(C₂)。室内を半周まわった入口のところで、戸に勢いよくぶつかる。N.K 児が降りると、ひとりで室内を乗りまわす(c)。終り頃、N.K 児のバトカーに追いかけられ、そして、ぶつけられて、二輪車の後輪のはめガラスをこわされる。その破片を拾って、㊦に「食べれ」といって笑う(B₁)。N.K 児がトラックに手を触れようとする、触れさせない(a₂)。砂場から拾った石を㊦に「食べれ」といって笑う(B₁)。N.K 児が砂場で遊んでいると、I.T 児も砂場に行って、N.K 児のじゃまをする。N.K 児に砂をかけられると、砂場から出て、大声をあげながら、からのダンボール箱をふみつける(a₁)。また、N.K 児にピストルをつきつけたりする(A₂)。時間の終了を告げると「ヤーダヨ」といっていた(a₁)が、「チェンチェは?」と聞いて、㊦について出る。

○N.K 児は10分ほどおくれて入室。まず終了時間を聞く。自動車をみつけて、手を触れようとするが、I.T 児に取りあげられる。二輪車に関心を向けると、I.T 児が乗ってしまったので、その後に乗せてくれるよう主張し(C₂)、㊦の仲介で、少しの間乗る。二輪車から降りると、砂場に行くが、すぐに今度は、バトカーに乗る(c)。I.T 児に「何歳だ」とくりかえし聞く(D₂)が、答がえられない。そのうち、「ボクが1番だよ」といいながら、I.T 児の車を追いかけて、I.T 児の車にぶつける(A₂)。I.T 児の車の後輪のはめガラスがこわれると、「ヤーイ、ヤーイとれた」「ボクがぶつかったから、とれたんだ」という(A₂)。バトカーから降りると、木のつちをとりあげ、テーブルを思い切り強く打つ(a₁)。トラックに触れようとするが、I.T 児がかさないの、砂場で砂遊び(c)。I.T 児がじゃまをする、砂をかける(A₂)。鼻うたをうたいながら、砂でトンネルをつくり(c)、I.T 児がピストルをつきつけると、「ダメー、ダメー」といいながら砂をかける(A₂)。時間の終了を告げると、「トンネルをつくってから」というが、間もなくやめて、I.T 児に「終わったよ」「おいてくよ」といって先に立つ(B₂)。

○(㊦の行動) 子どもどうしの意志の交流を助けて、仲よくなれる契機を用意してやるように気を配ったが、そのほかは、子どもどうしの交流を見守る態度をとる。時には、ハラハラさせられる場面もあっ

＜第11回＞



ゆくよう、⑩は介入せず、温く見守る態度を保持するよう努めた。

2) 各子どもの治療経過

<I.S児>

I.S児の7回の遊戯療法の経過を、3期に分けて後づけてみると次のようである。第1期(1~3回目)は、無理に母親から分離し入室させた時期で、彼の情緒の混乱は著しく、遊戯室での全時間は、泣き叫ぶことで過ぎた。1回目は、ドアのところで、治療者の手をしっかり握り、時々、柱時計をふりかえっては、異常な興奮を示して激しく泣く、地だんだふむ、ドアをたたく、というありさまで、その緊張や泣き声は、不安というより、むしろ恐怖を訴えているようであった。2回目になると、目の前に出ているおもちゃを、泣いているあい間に、すばやく棚に片づけたり、治療者の出したボールを取りあげ、ほかの方に投げつけたりして、遊びを拒もうとする態度を強く示す。3回目には、緊張して激しく泣くことは少なくなったが、治療者を自分のそばからはなすまいとする態度は変わらない。

第2期(5~6回目)は、主として、母親がI.S児を遊戯室に入れようと努力した時期で、母親がそばにいと、いくらか、おもちゃに関心を示すこともあったが、結局、母親の退出について外へ出てしまい、遊戯室には、短い時間しかいない。

第3期(9~10回目)は、母親がI.S児を遊戯室に入れようと初めは試みるが、I.S児が拒否して泣くので、その試みをやめ、母親と過ごすようになった時期で、I.S児はこの期間、遊戯室にはほとんどはいらないでしまうことになった。

<I.T児>

I.T児の遊戯療法の経過を、4期に分けて追ってみると次のようである。第1期(1~3回目)は、とまどいや抵抗から、やがて、おもちゃへの関心を示すという経過をたどる時期で、1回目は、はじめてひき合わされた治療者とメンバーに、驚いた様子で泣き出してしまふ。前の担当者がいっしょにいたが、それでも不安はぬぐわれず、ついに遊戯室を出てしまふ。2回目は、母親といっしょに入室し、母親が去ると、泣いてあとを追ひ、再び連れもどされる。しばらく泣いているが、少したってから、治療者の出したおもちゃに触れてみたり、後半は、おもちゃを操作したりするようになる。しかし、治療者の働きかけ(スリッパをそろえてやる)には抵抗を示す。3回目は、母親に、無理に遊戯室に入れられしばらく泣いている。そして、治療者の出したおもちゃをテーブルの上から床にたたき落とすなどの抵抗を示したが、その後は、自分でおもちゃを出して遊び、治療者にも、少しずつしゃべりかけるようになった。

第2期(5~6回目)は、もう泣くことになくなり、ひとり遊びを活発に展開するようになった時期である。自動車を動かすこと、砂をほかの場所に運ぶことが、主な活動であるが、その間に、5回目には、トロッコの砂をひっくりかえしたことから、集団の仲間とのかかわりが生じた。6回目には、治療者との関係をためすような、否定的な行為が示された。

第3期(8~9回目)は、感情の表出がさかに行なわれるようになった時期で、人形の首をもいで投げつける、おもちゃかごをひっくりかえす、砂を床にばらまく、テーブルやいすをひっくりかえすなどの否定的行為が目立ち、大声をはりあげ、笑い、歓声をあげるなど、思い切った自己表出がみられた。また、言語は明瞭ではないが、治療者に絶え間なくしゃべりかけ、注意を求めようとする。集団の仲間

との関係では、拒否、否定、攻撃などの行為が目立った。

第4期(10～11回目)には、ようやく、集団の仲間と協力的な関係がもてるようになる。仲間との関係は、特に、N.K児との組み合わせで生じ、発展したようで、10回目の二輪車の相乗りが契機となって、より接近し、11回目には、I.T児の方から積極的にはたらきかけるようになり、やがて、トラックの砂運搬作業を、2人で共同して行なうという協力関係が生まれることになった。この遊びの中では、これまで仲間の質問に反応を示さなかった彼も、自然に回答し、ことばのやりとりをしている。

<N.K児>

N.K児の遊戯療法の経過には、特に、くぎりをつけるような目立った契機はないが、ほかの仲間とのかかわりという観点から、2期に分けて追ってみると次のようである。前半期(1～7回目)は、ほかの仲間に関心をもつが、相手の方で反応を示さないので、主として、ひとり遊びを続けた時期である。自分で遊びを選択し、ほかの仲間が加わると、リードする。多少発音に不明瞭な点があるが、治療者に対する質問や話しかけがさかんで、時間中、絶え間なくしゃべり続けている。

後半期(8～11回目)には、ほかの仲間への関心を積極的に示し、相手に年齢をくりかえし聞いているが、その仲間の中で、自分が一番強いなどと優越性を強調し、仲間への競争、反撃も著しい。しかし、最終回には、そうした優越性を特に強調することなく、相手を認め、相手に同調しようとする態度がみられるようになった。

<T.T児>

T.T児の遊戯療法の経過をとおして、彼の表面的な行動をみる限りにおいては、特に著しい変化はみられない。終始発言することなく、おもちゃに手を触れることなく、ただ、室内を歩きまわるのみ、あるいは、ほかの仲間の行動を傍観しているのみであった。しかし、一見相変わらないようにみえる彼の行動の中にも、注意して観察すると、微妙な点で変化が伺える。仲間のいろいろな行動を間接的に経験して以後、同じ室内のはいかい(徘徊)にも、動きが大きくなり、大胆さが加わったように感じられる。また、仲間の1人とかかわりでは、相手の攻戦を受けてたつ態度もみられた。おもちゃへの関心も、ただ遠くから眺めるのではなく、近くにいてのぞきこんだり、足でそっと触れたりしている。

3) 母親の面接相談

母親については、集団によるカウンセリングが実施されたが、その詳細な経過は省略し、ここでは、それぞれの母親についての感想(面接相談担当者の)を記しておくことにする。

<I.S児の母親>

はじめは、子どもがある程度遊びに参加できると考えていたようであるが、回数がすすむにつれて、子どもが遊びに参加しないことがはっきりして、あせっていたように思われる。このことは、母親のグループに対する態度にあらわれ、他のメンバーからのわが子に関する発言、あるいは、話題がわが子にふれることを、極力おそれるため、自分自身の発言もひかえめになっていた。しかし、9～10回においては、1種のあきらめにも似た感じがあったと思われる。

<I.T児の母親>

初回、子どもが遊戯室には入れるものと考えておったが、はいれない事実につづき、その後、I.S児の母親同様に口をつぐむことになった。しかし、回数がすすむにつれて、子どもが遊びに参加するよ

うになって、母と子どもの幼稚園での様子や、日常の生活の様子などを話すようになった。終わる頃はある程度の安定感を持ち、N.K（母親）の子どもの知能の問題や、I.S（母親）の子どものことなどに干渉的に発言するようになった。

<N.K児の母親>

わが子を知能の低い子と考えて、いろいろ読み書きを教育しているといったり、調査票提出のおくれを気にしたりしていた。I.S（母親）、I.T（母親）の子どもの様子には、はじめ無関心であったが、のちには、同情していた。T.T（母親）に対しては好意的に接していた。おわりに、一応子どもの成長を認めていた。

<T.T児の母親>

はじめは、わが子は、グループの子どもと異なると思っていた。たとえば、I.S（母親）、I.T（母親）の子どもは泣いたりしているし、N.K（母親）の子どもは、知能が低いと考えていたようである。しかし、回数を重ねるにしたがい、わが子の非社会性がいまだ改善されないことを注目しだし、N.K（母親）の子どもに同情的であり、I.S（母親）、I.T（母親）を勇気づけていた。

4. 結果と考察

集団遊戯療法を実施した結果、それぞれの子どもは、どのように変容したであろうか。子どもの適応に改善がみられたであろうか。このことは、いろいろな観点から検討されなければならないのであるが、ここでは、主として、治療過程における子どもの行動の変化をとらえて、それに、治療前後に実施した検査の結果を補って、考察を試みることにする。

1) 各子どもの変容

<I.S児について>

I.S児は、遊戯療法の経験がほとんどないままに、いきなり集団による遊戯療法にはいったもので、そのためか、今回の試みには、最も大きい抵抗を示した。治療経過の中で述べたように、彼は治療時間中ほとんど、激しく泣いており、仲間やおもちゃへの関心を示すどころか、ただ、遊戯室から逃がれようとするだけであった。そして、終り頃の回になると、ついに、遊戯室にはいらなくなった。I.S児は結局、母親から離れて「遊戯室にはいる」という、遊戯療法開始以前の問題も解決できずにしまい、この点からみると、彼の治療過程は後退をさえ示しているといえる。治療開始前と終了後に実施した社会成熟度診断検査、および乳幼児精神発達質問紙（以下、精神発達検査とよぶ）の結果も、治療後の方がむしろ、得点がいづらか悪くなっており、この試みの失敗を物語っている。

失敗の原因としては、I.S児の問題に対する見通しが甘かったことがあげられる。彼の問題は、社会的適応にからむ問題というより、むしろ、より深く情緒的なものに根ざしていたように思われる。したがって、彼に対する充分な見通しをもたないうちに、いきなり集団遊戯療法のメンバーとして組み入れたことに問題があったのであって、今後は、個人による遊戯療法を根気よく継続することを検討している。

<I.T児について>

I.T児は、今回の試みにはいる前に、別の治療者と10回ほどの個人的な遊戯療法を経験しているが、

本人の納得を得ないで、治療者がかわり、グループに入れられたため、はじめのうちは、とまどいを感じたようである。しかし、後期にいくにしたがい、動きも活発になり発言も多くなり、他のメンバーとのかかわりももてるようになって、4人のメンバーの中では最も変化が著しい。

治療経過の中で具体的に述べたように、はじめは泣いて遊びにもはいれなかったのであるが、やがて治療者とも親しみをもつようになり、遊びに参加するようになった。治療の進行につれ、遊びはいっそう活発になり、治療者の注目をひくような否定的行為が著しくなる。こうして、彼は、自己表出の安全性を確かめ、感情の解放をはかったものと思われる。

仲間との関係については、仲間と無とん着なひとり遊びの状態が、やがて、仲間と協力的に遊べるようになるという状態にまで変化を示した。彼のひとり遊びにおける自己本位の行為が、仲間の非難を受けることになり、それに対する拒否的、否定的、攻撃的なかわりが、仲間との間に生ずる。治療の進行につれて、やがてその仲間を受け入れることができるようになり、受動的、能動的なかたちをとりながら、協同活動がもたれるようにまでなったのである。ひとり遊び、あるいは対人関係の中で発せられることばは、依然幼稚であるが、治療の後期には、発言の量も多くなり、発音の明瞭度も増してきた。

治療前後の検査結果から、社会成熟度をみると、治療前に比べ治療後は「集団への参加」と「基本的生活習慣」の項目得点が、いくらか伸びており、また、精神発達検査の結果でも「社会」と「生活習慣」の得点がよくなっている。

I.T児の社会的適応を改善するうえで、集団遊戯療法の経験は得るところがあったものと考ええる。特に、N.K児の存在は、彼の人間関係を発展させるうえで、大きな影響を与えたようである。

<N.K児について>

N.K児は、今回の試みに参加する以前に、2回ほど個人的な遊戯療法を経験している。今回のメンバーの中では、最も元気があり、多弁で、自己を主張することの強い子どもである。多少吃音の傾向があり、発音の不明瞭な点もあるが、このことが、仲間から嘲笑を受けるというような集団ではなかったことと、遊戯室の雰囲気を知っていたための安定感から、はじめから自由に発言し、活発に遊んでいた。

仲間に対する関心は、はじめから示したが、反応が得られないので、ひとり遊びが主軸になった。仲間の1人が、その遊びをじゃまするような行為をすると、子どもらしく率直に不満を表明し、抗議をする。時には、砂をかけるなどの攻撃もする。また、仲間の中で、自分の優越性を折にふれ強調し、競争を試みる。いろいろなかたちで仲間にはたらきかけ、しかも、それが、度はずれたものでないので、グループの他のメンバーには、適度の刺激となったようである。また、彼自身も、もどかしい仲間のグループにおかれては、自己優越的な態度もひっこめざるを得なくなり、ありのままの仲間を受け入れ、これに同調して遊ぶという柔軟性が認められるようになった。

治療前後の検査結果では、社会成熟度に進展はみられないが、精神発達検査の「運動」「探索」「社会」「生活習慣」の各項目に得点がよくなっている。

<T.T児について>

T.T児は、今回の試みにはいる前、筆者と8回ほどの個人的な遊戯療法を経験してきている。したがって、今回は、同じ治療者との関係の中で、集団による遊戯療法を経験することになるが、その影響はどうか。治療経過の中でも述べたように、室内のはいかい(徘徊)と、ほかのメンバーの行動

の傍観とで、彼の治療時間の多くは費やされたが、治療過程において仲間が演じたさまざまな行為は、彼の固い気持を解きほぐすのに効果があったと思われる。室内を歩きまわる行動にも、大胆さが加わるようになったし、のぞきこんだり、(手でなく)足で触れたりなど、おもちゃへもより接近するようになり、また、仲間の働きかけに、応じられる態度もみえてきた。とにかく、グループの経験は、彼の表面的な行動を変えるまでにはいたらなかったが、自己を閉ざすことに頑固だった、彼の気持の解放には力があつたものと考えられる。

治療前後の検査結果では、社会成熟度の「ことば」「自発性」「基本的生活習慣」の得点が、治療後かなりよくなっている。また、精神発達検査では、「運動」「探索」「社会」「生活習慣」「言語」の各項目とも得点がよくなっている。

2) 全体的考察

上にみてきたように、今回の試みにより、1人の子どもの除くほかの3人は、それぞれに、なんらかの変容を示していることが認められたが、その変容には、集団という特質、すなわち、メンバー相互の関係における影響が大きいと考えるのである。

それぞれの子どもが、グループの中で果たした役割を考えてみると、次のようにいうことができよう。I.S児は、ありったけの力をふりしぼって泣くことだけで終わったが、ほかの仲間にとっては、はじめはその泣き声に誘われて気弱くなる子どももあったかもしれないが、のちには、自分はそのように取り乱しはしないという、むしろ自信のような、優越感のような感情をもたせるようになったのではないかと思われる。I.T児は、治療中頃より、乱暴な行為をさかんにするようになったが、この行為は、ほかの仲間の気持を解放するうえに、力を与えたように思われる。また、自己本位の遊びは、ほかの仲間といざこざをおこす原因ともなり、それが、仲間関係の発展に契機を与えることになったようである。

N.K児は、活発で、自発的に行動する標準的な子どもであるが、このことが、ほかの仲間のモデルともなり、また、その正当な抗議は、仲間の不当な行為の矯正に力があつたと思われる。T.T児は、他に影響を及ぼさない、おとなしい存在であるが、仲間の行動の観察者としての、また、受け手としての存在の意味がある。それぞれの子どもの個性の違い、それが組み合わされて、今回の結果がもたらされたものと考えるのである。

いっぽう、今回の試みには、いくつかの重要な問題点が指摘される。まず、集団の構成メンバーの選択についてであるが、先に述べたように、I.S児の選択には無理があつたことである。本人自身に治療が有効に働かないだけでなく、仲間や治療者への影響も大きい。次に問題としたいのは、遊戯治療各回のメンバーの人数であるが、集団は一応4人の閉鎖集団として出発したが、メンバー全員がそろつたのは、11回中1回しかなく、あとは3人集団、あるいは2人集団で、治療がすすめられることになった。したがって、メンバーの組み合わせにより、相互関係が限定されたようである。さらに、治療者の技術の問題も検討しなければならない。集団における個々の子どもへの接し方、反応の示し方や、泣き叫ぶ特異な子どもの扱い方など、はじめての経験とはいいいながら、未熟な点が多かったことを反省している。子どもの治療担当者として、特に集団の扱い方については、いっそうの研修の必要を痛感したしだいである。

お わ り に

この報告は、昨年にひきつづき、毎日行なっている教育相談活動の一端を、研究的にまとめたものである。今年、特に、集団遊戯療法を研究課題に取りあげ、その実施を試みたのであるが、その結果、その方法にいくつかの問題点はあったにしても、集団遊戯療法独自の有効性がある程度、明らかにされたように思う。今後は、もっと積極的に、日頃の教育相談活動に取り入れて、その有効性を生かしていくとともに、その治療過程の客観的な分析を積みあげていかなければならないと考える。したがって、今後に残された課題としては、集団遊戯療法の治療過程をどのような観点から観察し、記録し、分析していったらよいかという、より科学的な方法の究明がある。さらにまた、集団遊戯療法をどのように教育現場に生かしたらよいかという問題も、今後に残された大きな課題であろう。

この研究をすすめるにあたっては、相談部担当所員の積極的な協力を得たもので、報告をまとめ執筆したのは池田要子である。

参 考 文 献

- | | | |
|--------------------------------|---------------|-----------|
| ヘイム・G・ジノット著
中村悦子訳 | 「児童集団心理療法」 | 新書館 |
| V・M・アクスライン著
小林治夫訳 | 「遊戯療法」 | 岩崎書店 |
| S・R・スラブソン著
小川太郎、中根清道共訳 | 「集団心理療法入門」 | 誠信書房 |
| S・R・スラブソン著
小川太郎、中根清道、遠藤辰雄共訳 | 「分析的集団心理療法」 | 誠信書房 |
| カール・R・ロジャース著
友田不二男訳 | 「遊戯療法・集団療法」 | 岩崎書店 |
| C・E・ムスターカス著
古屋健治訳編 | 「児童の心理療法」 | 岩崎学術出版社 |
| 霜田静志・北見芳雄・篠崎忠男共著 | 「集団分析」 | 誠信書房 |
| 牛島義友・沢田慶輔編 | 「教育社会心理学講座 3」 | 明治図書 |
| 紀 要（昭和40年度） | 「集団遊戯療法の試み」 | 東京都立教育研究所 |